伊佐市 じまんばな誌 ③ 天堂ヶ尾 関白陣跡

伊佐を一望できる関白陣からの壮大な眺めに、戦国の英雄たちのドラマがよみがえる。

曽木の天堂ヶ尾頂上よりの眺め

天下人豊臣秀吉が大軍とともに

戦国時代と言えば、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康という3人の名前が出てきませんか。織田信長が本能寺の変で亡くなり、後を受け継いだ豊臣秀吉は関白となります。天下人ではありますが、まだまだ日本全国が統一されたわけではなく、天正15年（1587）に九州へやって来ます。目的は、九州統一までであと一歩と迫っていた島津氏を征伐するためです。20万とも言われる大軍を率いて薩摩に入った秀吉は、薩摩を支配していた島津義久と川内の泰平寺で会見し、両者の間で和議が成立します。というのも、義久は宮崎県の木城（きじょう）町の根白坂（ねじろさか）で繰り広げられた秀吉の弟・秀長との戦いに負けていて、秀吉の大軍相手に勝ち目はないと見て降伏した方がいいとの判断でした。ところが、島津の太守であった義久には3人の弟がいて、その中のひとり歳久（としひさ）は和睦に猛反対、徹底的に豊臣軍と戦うべしと反旗をひるがえします。大口城主であった新納忠元（にいろただもと）も抗戦派で、秀吉の使いを追い返したほどです。

絶好の場所に陣取った秀吉

そこで、秀吉はなんとか新納忠元を従わせようと、川内から山崎・鶴田を通って、曽木の天堂ヶ尾（てんどうがお）に陣を敷きます。いわゆる関白陣と呼ばれる場所です。標高300mほどの関白陣に立つと、北には新納忠元の居城である大口城はじめ伊佐盆地すべてが手にとるように見えます。数々の戦いに勝利してきた秀吉ならではの目利きの良さといいますか、関白陣が絶好の位置に設けられたことに感心してしまいます。

秀吉は、この関白陣から大口城主の新納忠元にプレッシャーをかけながら、会見することを楽しみに待ちました。

一方、忠元は「一戦も交わえることもなく秀吉の軍門に下ることは、薩摩に人なきが如しである。断じて忍び難い」との心意気で秀吉の使者を追い返し続けました。しかし、『君命である、速やかに下城して秀吉公と会見せよ』との主君義久公の命が下り、それに従った忠元は、断腸の思いで秀吉に会見しました。

会見後のことは、『チンチロリン』の連歌のやりとりなど面白いエピソードを現地の説明板で確認できます。

天堂ヶ尾石碑

忠元や秀吉ゆかりの地も

伊佐地方の桜の名所といえば忠元公園です。公園は伊佐の町が見渡せる小高い山の上にあり、春は千本桜でピンク一色に彩られます。ここに新納忠元を祀る忠元神社があります。忠元は島津きっての名将で文武に秀でていて、伊佐の地頭を務めました。この山を下って少し行った田んぼの中にお墓もあり、奥方といっしょに並んで葬られています。

なんとか忠元とも和睦を結ぶことができた秀吉ですが、関白陣での会見を済ませた翌日に帰途につきます。忠元は前日の御礼がてら大口の園田という場所まで見送りに行くのです。そのことを籠の中で知った秀吉は非常に喜んで、籠から降りて陣扇を与えたと伝えられています。その場所には、今も「秀吉の腰掛石」が残っていて、この石に腰掛けて忠元と語り合ったということです。もし、新納忠元が秀吉との徹底抗戦をしていれば歴史が大きく変わったかもしれません。そうしたことを想像しながら、戦国の勇者たちの足跡を追ってみてください。

新納忠元公廟所

忠元神社

立ち寄りスポット

銘菓関白陣（福屋）

関白陣近くのお菓子屋さん「福屋」で作られているお菓子で、豊臣秀吉が「馬印」として使っていた瓢箪をモチーフにした形はユニークです。

針持温泉

つるつる美肌美人の湯として有名な温泉。アルカリ性単純泉で、効能は美肌（アトピー性皮膚炎、ニキビ、肌荒れ）、肥満、冷え症、神経痛 など。

忠元公園

語り手 原田 純一さん

大口歴史民俗鉄道記念資料館専門指導員で、地元の歴史、民俗、動植物などあらゆることに精通する。湯之尾神社に奉納される神舞を6才から舞ったことや、川内川でチスジノリを調査したことから郷土史研究を始めた。もともとIT関連の金型技術の仕事に携わっていた。

詳しい地図へ QRコード➡